トビウオ資源開発調査

本永文彦

1.目的および内容

八重山〜沖縄島海域に分布するとびうお類の魚種組成や出現時期、回遊を明らかにし、本種の基礎的な生物情報を得る。

平成2年度の調査では、20種のとびうお類が出現したが、漁獲の多くはオオメナツトビであった。また、地域別魚種組成や魚種別出現時期を解析するため、漁獲統計と魚種割合に関する資料を収集した。さらに、体長や体重、生殖腺重量などの測定を行い、本種の成熟や成長に関する資料を収集した。

なお、八重山、糸満、伊江島の各漁協職員の方々には、標本魚の購入に便宜を図って頂いた。また、八重山支場の久貝一成氏と島尻広昭氏、海老沢明彦氏には標本魚の送付で大変お世話になっている。さらに、琉球大学理学部の吉野哲夫氏にはとびうお類の分類と査定で多くの指導をうけた。これらの方々に厚くお礼申し上げる。

2.方法

1）**漁獲実態**：八重山魚協と糸満、伊江島の3魚協について、漁獲量の集計を行った。

2）**市場調査**：3漁協で水揚げされるとびうお類を定期的に購入し、地域別魚種組成や魚種別出現時期、漁場の季節変化を明らかにする。

3）**生物測定**：測定項目は体長、体重、生殖腺重量を測定し、性別と塾度を調べた。また、年齢査定のために耳石を1調査あたり5尾程度について採取し保存した。

3.結果と考察

1）**漁獲実態**：とびうお類は漁獲のほとんどが本土へ空輸されるため、伝票は販売された日付で整理されており、漁獲日毎の記録は見当たらない。現在、販売伝票から日別の漁獲資料を作成中であるため今後報告する。

2）**市場調査**：今年度は初めての調査年度ということで、琉球大学理学部吉野哲夫先生に魚種分類についての指導をうけた。初年度の調査では20種が出現した。

市場におけるとびうお類の銘柄は、魚体の大きさにより、大・中・小に分けられている。県内のとびうお漁は市場価値の高い大型種の回遊する3〜5月に主に漁獲している。この期間の魚種割合を求めるために、大型種の魚種組成を定期的（月3〜4回）に調査した。その結果、各地ともオオメナツトビの漁獲が最も多かった。季節的に魚種組成が変化するようだが、資料が充分ではないため、今後の調査結果を含めて報告する。また、魚種毎の出現量の季節変化を求めるには、漁獲量と魚種組成の季節変化に関する資料がともにそろう必要がある。これらの資料もいまだ不充分であり、資料の蓄積を待って解析したい。

3）**生物測定**：漁獲された魚は成熟個体あるいは産卵後の個体で占められているため、産卵による接岸であると思われる。得られた生物測定結果から、魚種毎の生殖腺塾度の季節変化を整理するにはいまだ資料が充分ではないため、今後の資料の蓄積を待って別途報告する。